熊本大学教育実践研究　第36号，203－210，2019

音を聴こう，音や音楽でイメージを表現しよう

倉田沙耶香*・荒川由希子*・瀧川　淳**・藤原志帆**

Listen to the music, and express the image by sound and music

Sayaka KURATA, Yukiko ARAKAWA, Jun TAKIKAWA and Shiho FUJIHARA

1．はじめに

2017年４月から2018年３月までの１年間，熊本大学教育学部附属特別支援学校と熊本大学教育学部で共同研究を行った．

本稿では，高等部で行った創作活動（音楽づくり）の実践内容，成果と課題について報告する．

１）　教科選定の理由

熊本大学教育学部附属特別支援学校高等部では，「フォローアップミーティング」を行っている．これは，卒業して３年，６年，10年後の「働く」「家庭」「余暇」の３つの生活について面談を実施し，生徒のフォローアップを行うものである．この際，アンケートを実施したところ，働く生活に関しては伸びがみられるが，一方，家事，外出や趣味等の家庭生活と余暇生活の項目に落ち込みがみられることが分かった．

それを受けて，今年度は体育，音楽，家庭の３つの教科を研究対象として選定した．

２）次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ　第２部改定の具体的な方向性　音楽，芸術（音楽）から

①成果と課題

音楽科，芸術科（音楽）では，音楽のよさや楽しさを感じるとともに，思いや意図を持って表現したり味わって聴いたりする力を育成すること，音楽と生活との関わりに関心を持って，生涯にわたり音楽文化に親しむ態度を育むこと等に重点を置いて，その充実を図ってきた．

一方で，感性を働かせ，他者と協働しながら音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさや価値等を考えたりしていくことについては，更なる充実が求められるところである．

今回の学習指導要領の改訂においては，これまでの成果を踏まえ，これらの課題に適切に対応できるよう改善を図っていくことが必要である．

②育成を目指す資質・能力の整理

育成を目指す資質・能力については，「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」の三つの柱に沿って整理が行われている．**表１**は高等学校芸術（音楽）における育成を目指す資質・能力である．

表１　育成を目指す資質・能力（抜粋）

○知識・技能 ・個性を生かした音楽表現を創意工夫したり，表現意図を音楽で表現したりするための技能を身に付けること　など
○思考力・判断力・表現力等 ・感性を働かせ音楽を形づくっている要素を知覚し，それらの働きを感受しながら，知識を得たり活用したりして音楽を自分なりに解釈したり，音楽と生活及び社会などとの関連から音楽を捉えたり，自分や社会にとっての価値を考えたりし，よさや美しさを味わい音楽の意味や価値を創造すること　など
○学びに向かう力・人間性等 ・音や音楽のよさや美しさなどの質的な世界を価値あるものとして感じ取る感性 ・協働して音楽活動する喜びの自覚 ・美しいものや優れたものに接して感動する，情操豊かな心としての情操　など

芸術への永続的な愛好心を育み，感性を高め，豊かな情操を養う教科であり，一人一人がそれぞれの興味・関心や個性を生かして，芸術と幅広く，かつ，多様な観点から主体的に関わっていくことが重要である．つまり，学校を卒業した後も，生涯にわたり芸術文化を尊重する態度の育成を重視していくことが大切である．

③見方・考え方

高等学校芸術科（音楽）には**表２**の通り，記述されている．

＊ 熊本大学教育学部附属特別支援学校
＊＊ 熊本大学大学院教育学研究科

表２　高等学校芸術科（音楽）における「見方・考え方」

感性を働かせ，音や音楽を，音楽を形作っている要素とのその働きの視点でとらえ，自己のイメージや感情，芸術としての音楽の文化的・歴史的背景などと関連付けること．

音楽の教科の特徴は，知性と感性の両方を働かせて事象を捉えることである．また，個別性の重視による多様性の包容，多様な価値を認める柔軟な発想や他者との協働，自己表現とともに自己を形成していくこと，自分の感情のメタ認知なども含まれており，そこにも音楽を学ぶ意義や必要性がある．

「感性」の働きは，感じるという受動的な面だけではなく，感じ取って自己を形成したり，新しい意味や価値を創造したりしていくことなども含む．また，「感性」と知性は一体化して創造性の根幹をなすものであるため，生徒たちの創造性を育む上でも，音楽がこのことを担っていると言える．

④教育内容の改善・充実

思考力・判断力・表現力を高めるため，言語を用いた言語活動を行うほか，言語以外の方法（音や形，色など）を用いた言語活動や，音や形，色などにより表現されたことを捉えて言語化する活動を行っている．捉えたことを，喩えたり，見立てたり，置き換えたりすることは表現や鑑賞を深めていく際に重要な活動である．

このため，アクティブラーニングの視点からの学習・指導の改善・充実を図る上でも，現行の学習指導要領において重視されてきた言語活動については，教科の特質に応じた充実を図ることが求められる．

２．実践経過

これらを踏まえて，本研究では創作活動を通して，器楽による音楽の表現力を高める学習を行った．

１）生徒の実態

熊本大学教育学部附属特別支援学校高等部には，１年生から３年生まで計26人の生徒が在籍している．読譜力（簡単なリズム譜を見て演奏する力）や聴取力（音楽の諸要素を聴き取る力）を基に，音グループと楽グループの２つに分かれて学習を行った．

本研究の対象は音グループで，１年生３人，２年生５人，３年生６人，の計14人（男子10人，女子４人）である．４分音符と４分休符のリズム譜を見て，太鼓等の打楽器を譜面通りに演奏することはできるが，音色等を工夫して演奏するまでにいたっていない．

しかし，音色，リズム，速度，旋律，強弱等，音楽を形づくっている要素については，ある程度聴き取ることができ，気付きをワークシートに言葉や絵で表現してまとめることができる．またお互いの意見を話し合いながらよりよい表現を求め合うことができる生徒が多い．

２）題材について

①題材のねらいと概要

そこで，本研究では「花火」を題材に創作し，イメージを基に音楽をつくる活動を通して，奏法を工夫したり，音色を工夫したりして器楽の表現力を高める実践を行った．

②題材の目標

題材の目標は**表３**に示した三点である．

表３　題材の目標

○知識・技能 様々な楽器やその奏法を知り，演奏することができる． ○思考力・判断力・表現力 自分のイメージをもち，音や音楽で表現することができる． ○主体的に学習に取り組む態度 班でお互いの音を聴き，話し合い，良かった点や工夫点等に気付き，音色を工夫しようとしたり，音や音楽でイメージを表現しようとしたりすることができる．

③題材計画

本題材は４次（５時間）の取り扱いである．授業づくりをする上で，“音から音楽へ”発展的に活動ができるように，題材を計画した．**表４**が題材計画である．

表４　題材計画

授業１ （１時間）	○音を聴こう，楽器を知ろう 様々な楽器を鳴らし，楽器特有の音質や音色を知る．
授業２ （１時間）	○イメージを音で表現しよう 絵を見て，イメージしたことを音で表現する．
授業３ （２時間）	○イメージを音楽で表現しよう 動画を見て，イメージしたことを音楽で表現する．
授業４ （１時間）	○イメージを演奏しよう つくった音楽を発表する．

３）実践内容

①熊本大学教育学部附属特別支援学校と熊本大学教育学部との連携

2017年８月下旬，本研究を実践するメンバーの顔合わせを行い，概要説明を実施した．また，８月28日には，本題材の内容について打ち合わせを行った．

本題材では，「音楽づくり」の研究を行うこと，音あそびやイメージを音や音楽にする活動を通して表現力を高めるアプローチを行うことを確認した．

また５回実施した授業すべてにおいて，共同で授業づくりをした．とりわけ音から音楽へと発展する段階での授業（第２次から第３次へ）前には，再度打ち合わせを行い，細かな内容を確認し合った．

②授業実践

授業１　音を聴こう，楽器を知ろう

音との出会いを大切にしたいという思いから，楽器特有の音質や音色を探るために，活動を二つ準備した．

活動１では，音の再現を行った．生徒の視覚情報を遮り，教師が楽器を鳴らす．その音に生徒たちは耳を澄まし，提示された二つの楽器のうち，どちらの楽器の音なのかを考え，選択する．また，その楽器をどのように鳴らすと同じ音がするのか，奏法を工夫して音の響きや質感を探る．

この活動は，１年生と２年生，３年生の二つの班に分かれて実施した．様々な音色が奏でられることに気付かせるために，持ち方や叩き方等，奏法の違いで音の変化が分かりやすいように，クラベスを用いた．また，選択肢としては，素材の違いと音色の違いを感じ取ってほしかったため，木製のクラベスとは異なる，革製の楽器であるタンブリンを準備した．

音の響きや質感を感じ取ったようで，両方の班ともすぐにクラベスを手に取った．「木っぽいよね」「カンカンしてたから」など，活発な意見が交わされていた．

しかし，奏法については，意見が分かれた．クラベスをしっかりと握って叩いても，二本が合わさるように叩いてみても響きが足りず，何度も叩き合っては「これ違う，もっと高い感じの音」など，具体的に音の印象を伝え合っていた．

両方の班が導き出した答えは，軽く親指と中指の二本の指で支え，鳴らすというものだった．正解の叩き方ではなかったものの，音だけを頼りにとても近いところまで響きを寄せることができていたことに驚いた．

この活動を通して，生徒の感受する力や，班でお互いの音を聴き，気付きを話し合い，音色を工夫しようとする力の高さを感じた．

写真１　音の再現（クラベス）

活動２は，様々な楽器を好きに鳴らす時間を設定した．準備した楽器は20種類を超えるが，その一部を**表５**で紹介する．

表５　使用した楽器の例

ハンドベル，トーンチャイム，キッズジャンベ，カリンバ，ミニグロッケン，ウィンドチャイム，スプリングドラム，マラカス，オーシャンドラム， ティンパニー，木琴，鉄琴，ピアノ，ハンドベル

この活動では，好きな音色の楽器を探すために，それぞれが自由に楽器を鳴らした．教師は奏法も提示せず，撥も様々な素材のものを一か所にまとめて置き，自分で選択して音色を確かめられるようにした．

例えば，オーシャンドラムはゆっくりと傾けることで穏やかな波が打ち寄せてくるかのような音を奏でることができる．しかし，生徒はオーシャンドラムを激しく上下に振り始めたのだ．筆者には「この楽器はこう奏でる」という固定概念があったため，生徒が楽器を上下に振っている様子を見た時には本当に驚いた．そして，バラバラと今までこの楽器からは聴いたことのなかった大音量の音を耳にした時に，生徒の感性の豊かさと，音や音楽の可能性の広がりを感じた．

このように，自由に楽器を鳴らす時間を設定したことで，様々な奏法で音を探り，その音に耳を澄まし，好きな音色を奏でられる楽器を探すことができた．

授業２　イメージを音で表現しよう

この活動では図を二つ提示した．**図１**は黄色で描かれた図形で，**図２**はそこに赤で二つ同じような図形を追加したものである．イメージに合った音を班で考え，楽器を選ぶことができるように，イメージを共有しやすい図を準備した．また，イメージに幅をもたせるために，抽象的な図を用いた．

図１

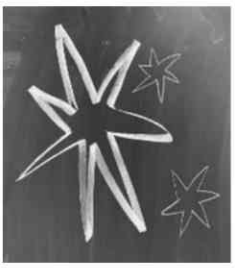


図２

これらの図を見て，イメージをもち，班で話し合い，実際に楽器を奏で，音で表現する活動を行なった．

図１を見て，「キラキラ輝く星のようだ」というイメージをもった班は，鉄琴を小さな音で数回鳴らしていた．また，「爆発している」というイメージをもった班は，太鼓を力いっぱい，一発鳴らしていた．

イメージから求める音色が異なり，選択した楽器やその奏法が全く違ったことにも驚かされたが，鉄琴を奏でた生徒の発言にはもっと驚かされた．

「キラキラした星のイメージに合うのは，固い撥で叩く音だ」と発表したのだ．早速毛糸のマレットと金属製のマレットの音を聴き比べてみると，生徒たちが，耳を傾けてうなづいていた．発言の意図を耳で確かめるかのように，生徒が耳を澄ましていた．

図２は，**図１**に図形を追加したため，ある班ではパートを分けて奏でていた．「黄色は太鼓とオーシャンドラム，赤の二つは木琴」という友達の説明を聞いて，生徒は納得したようだった．

提示した**図１**が抽象的なものだったため，様々なイメージの意見が出た．さらに，**図１**に図形を加えたことでイメージが膨らみ，音での表現方法が広がった．

また，生徒は言語を用いた言語活動を行うことはもとより，形や色などにより表現されたことを捉えて言語化して，それを共有し合い，音に置き換えることができることが分かった．

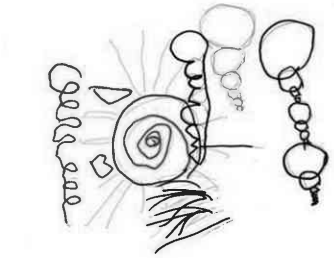
授業３　イメージを音楽で表現しよう

この学習で“音から音楽へ”と発展する．音や音楽で表現することができるように，イメージを共有しやすい映像を準備した．季節からも生徒にとって馴染みのある花火を題材とした．音色や奏法を工夫して，音楽づくりを行う時間を十分にもち，班で互いの音や音楽を聴いたり，話し合ったりすることができるように，この学習内容は２時間で取り扱った．

活動１では，花火の映像は十数種類提示した．打ち上げ花火，手筒花火，線香花火，ねずみ花火，手持ち花火等，規模も色彩も様々な映像を全員で鑑賞した．

ある生徒は大きな打ち上げ花火から壮大さを感じ，ある生徒は連続して打ち上げられる花火を煌びやかだと感じた．また，手筒花火から恐怖を感じた生徒もいた．

それらの花火へのイメージを図形譜で記したものが**資料１**，**資料２**である．



資料１
連続して打ち上げられる花火

資料２
手筒花火

音を聴いたり，イメージを音で表現する活動を積み重ねてきたことで，一人一人が確かなイメージをもち，それに合った楽器を選んだり，音色を工夫したりする様子が見られた．

また，記譜することで，生徒がイメージをどのように音楽で表現しようとしているのか，音楽づくりの過程を読み取ることができた．映像を音楽で表現しようとしている人と，感情を音楽で表現しようとしている人がいたことが，図形譜から見て取れたことは，とても興味深かった．

また，図形譜を黒板に並べて提示したことで，自分が誰の次に演奏するのか流れを確認することもできた．

活動２では，班に分かれて音楽づくりを行い，花火を表現した．自分の図形譜と友達の図形譜を見比べたり，活動１で使用した楽器の音色を比べたりして，自分たちで班分けを行った．結果，打ち上げ花火（太鼓類），盛大に連発して打ち上げられる花火（木琴，鉄琴，ティンパニー），キラキラした花火（鉄琴，ピアノ），様々な花火（オーシャンドラム，トライアングル，マラカス，シンバル，スプリングドラム，タンブリン）の四つの班に分かれた．

班分けでは，図形譜をもとにイメージが近い人や選んだ楽器の音色が近い人同士が集まることで，お互いのイメージをより意識することができた．

班では，お互いが花火のイメージ，音や音楽での表現方法等，意見を出し合い，一つの図形譜を記した．それをもとに，演奏しては図形譜に描き止める作業を繰り返し，一つの音楽を作り上げた．

各班の音楽を繋ぎ，１つの花火の音楽にするために，順番を確認した際にも図形譜を活用した．黒板

に提示した図形譜の順番を並び替えては演奏し，話し合いながら演奏の流れを自分たちで確定させていった．

写真２　班での音楽づくり

音楽づくり「花火」の流れは**表６**の通りである．

表６　音楽づくり「花火」

一人ずつ演奏する花火（14人） ↓ 班ごとに演奏する花火（４班） ↓ 全員で演奏する花火

それぞれの演奏の間は個人や班に任された．全員の部分は即興演奏に近く，友達の演奏を聴きながら好きなように音を重ねた．

生徒は周りの人の演奏のはじまりと終わりをよく聴いており，その中で自分がいつ奏でるかを考えて演奏する様子が見られた．周りの様子を見て，音を聴き，友達の演奏に応じて強弱を工夫している生徒もいた．

授業４　イメージを演奏しよう

第３次（授業３）までは，二つのグループに分かれて学習活動を行ってきたが，「イメージを音や音楽で表現する」という同じテーマで，互いのグループが学習してきたため，まとめとして，発表会を行った．音グループの活動内容は**表７**の四つである．

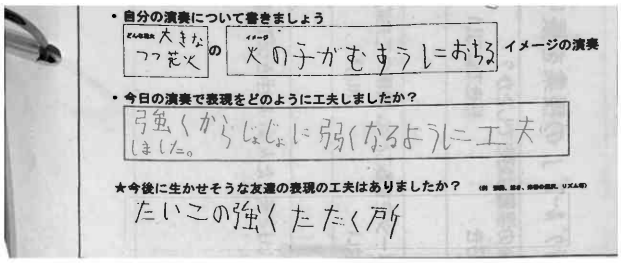
写真３　音グループの発表

写真４　楽グループの発表

表７　音グループの活動の流れ

・「花火」の演奏をして，ワークシートに感想をまとめる． ・「花火」の演奏への感想を，楽グループから聞く． ・楽のグループの演奏を聴き，ワークシートに感想をまとめる． ・演奏を聴いた感想を発表する．

資料３から，音の強弱やタイミング，響きなどを工夫して花火を表現しようとしていたことが分かった．また，友達の演奏から奏法や速さなどの表現の工夫を聴きとることができるようになり，今後の自分の演奏に生かしたいと思うようになったことも分かった．



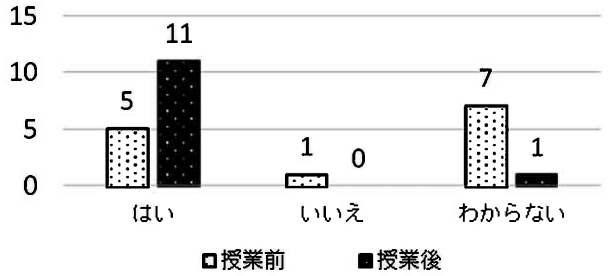
資料３　ワークシート

３．　成果と課題

１）　成果

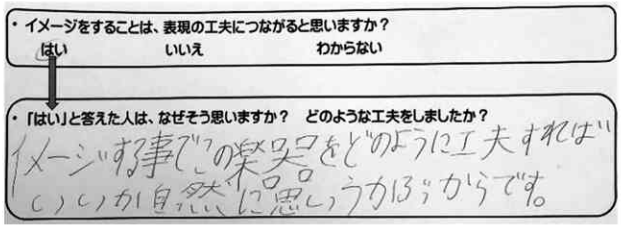
これまで５時間にわたり音を聴き，音や音楽でイメージを表現する学習を行ってきた．今まで器楽の経験はあったものの，音色等を工夫して演奏するまでにいたっていなかった生徒たちだったが，奏法を工夫したり音色を探ったりした経験を積み重ねて，表現を工夫する面白さを知った．

アンケートを実施し，「イメージをすることが表現の工夫につながりますか」という問いに対して，はいと答える生徒が二倍に増え，いいえの回答は０人になった．

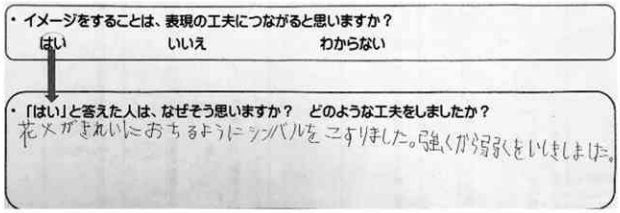


資料４　イメージすることが表現の工夫につながりますか？

イメージすることで奏法を工夫できることや，イメージと音や音楽が結びついている記述がワークシートにたくさんあり，その点からもイメージすることが表現の工夫につながっていると言える．

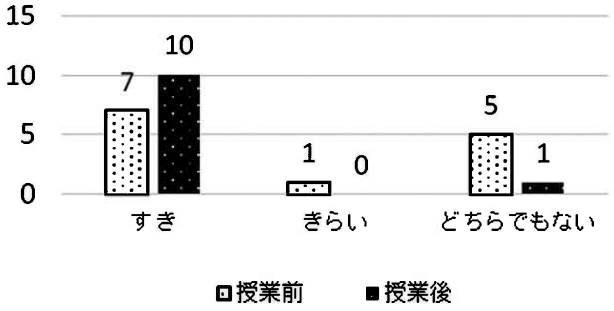


資料５　イメージと奏法の工夫



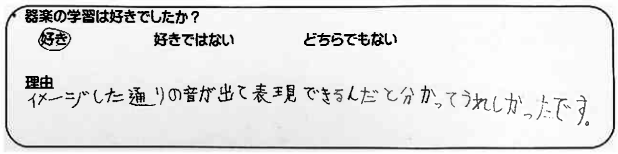
資料６　イメージとシンバルの奏法の工夫

また，「器楽が好きですか」との問いに対しては，どちらでもないと答えていた生徒が減り，好きと答える生徒が増えた．

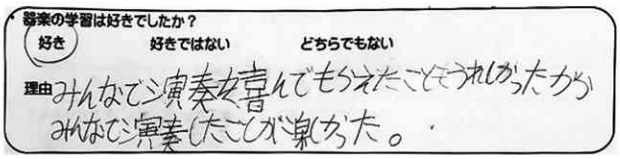


資料７　器楽は好きですか？

器楽を好きになった理由としては，イメージを音で表現できると分かりうれしかったこと，みんなで演奏して楽しかったこと，演奏を喜んでもらえてうれしかったことなどが挙げられている．



資料８　器楽が好きな理由①



資料９　器楽が好きな理由②

２）課題

今回，二つの学習グループで取り組んだが，学習過程で学んだことの意味や価値等を生徒が自覚できるには不十分な点があった．毎時の個の振り返り，二つのグループ間での相互の振り返り，そしてそれらを全体で共有する時間を十分に設定できていなかったことが課題として挙げられる．

「学びの価値付けと共有」がこれからの授業づくりにおいて鍵である．生徒が「〇〇が分かった」と実感したり，それを友達同士で共有したりできるように，授業改善を図りたい．

４．まとめ

今回，初めて創作活動に取り組んだが，授業づくりのポイントとなった点が４つある．

１）“音から音楽へ”発展的に活動を設定

本題材では，「音を聴く」「音で表現する」「音楽で表現する」「演奏する」と発展的に活動を設定し，生徒同士で創作活動が行えるように，互いの音を聴く時間や表現の工夫等について話し合う時間を毎時設けるようにした．

２）音を聴くための状況づくり（授業①）

奏法から音の響きや質感の違いが伝わりやすいようにクラベスを用いたり，視覚情報を遮断して聴く環境を整えたりした．また，音の再現を試みる活動を通して，生徒の興味や意欲が高まるようにした．

３）イメージを広げる視覚情報の活用（授業②，③）

絵や図形，動画等を用いたことで，自分のもつイメージを広げたり，友達とイメージを共有したりすることがしやすくなった．

また，音楽での表現にも広がりがもてるように，抽象的な絵を用いて，視覚情報を活用した．

4）イメージと表現を繋ぐ図形譜の活用

図形譜を活用し，「花火」のイメージや音や音楽による表現を共有しやすいようにした．また，図形譜をもとにイメージの近い人同士が集まることで，お互いのイメージをより意識することもできた．

また，図形譜を読み取ることで，イメージをどのように音楽にしようとしているのか，創作過程や意図を理解することもできた．

資料10　グループで作成した図形譜

5．おわりに

1）新学習指導要領の視点から

特別支援学校の学習指導要領が平成29年４月に告示された．中学部では「A 表現」の歌唱，器楽身体表現の三つに加えて，「音楽づくり」が新たに項立てられた．今まで器楽に含まれていた創作活動の部分である．

「音楽づくり」については特別支援学校（知的障がい）の中学部学習指導要領　○２段階　（２）内容　A 表現　ウの項目に記述されている．**表８**の通りである．

表８　特別支援学校　中学部　学習指導要領　音楽　平成29年４月告示

ウ　音楽づくりの活動を通して，次の事項を身に付けることができるよう指導する．
（ア）音楽づくりについての知識や技能を得たり生かしたりしながら，次の㋐及び㋑をできるようにすること．
　㋐　即興に表現することを通して，音楽づくりの発想を得ること．
　㋑　音を音楽へと構成することについて思いや意図をもつこと．
（イ）次の㋐及び㋑について，それらが生み出す面白さなどと関わらせて理解すること．
　㋐　いろいろな音の響きやその組み合わせの特徴
　㋑　リズム・パターンや短い旋律のつなぎ方や重ね方の特徴
（ウ）発想を生かした表現，思いや意図に合った表現をするために必要な次の㋐及び㋑の技能を身に付けること．
　㋐　設定した条件に基づいて，即興的に音を選択したり組み合わせたりして表現する技能
　㋑　音楽の仕組みを生かして，音楽をつくる技能

「音楽をつくる」ために，どのような指導を必要とするか，詳細に述べられている．ここからも分かるようように，今後「音楽をつくる」活動がこれまで以上に焦点化され，授業内容が一層充実していくと思われる．

2）「音楽をつくる」ということ，「音楽する」ということ

この授業実践で目指したことは，音と出会う場，音を探求する場をつくること．また，実際に出た音と自分の内にある音と対話すること．そして，音を通して仲間とコミュニケートすることである．

音楽の活動は，楽しいだけの授業に終始しても，また教師の考えを強要しても，生徒の音楽的発達は望めない．音を通した，自分や他者とのコミュニケーションを活動の中心に据えることが重要である．

なお，音楽づくりの「評価」だが，ルールによって音は音楽になるため，一人一人の前時からの創意工夫の発展，例えば音楽の捉え方や考え方，音の出し方，楽器の使い方等をしっかりと捉える必要がある．

独りよがりに音を出しても音楽にはならない．またグループで創作している場合には，例え音を出す活動（表現）であっても，「聴くこと」が一番大切であろう．これらの点を評価の観点に含めてほしい．

音楽づくりの活動は，器楽や唱歌活動へも発展する可能性を持っている．自ら音を探し，自分が求める音を友達と気持ちを合わせて表現することは，既成の器楽曲や歌唱曲においても生徒自らが主体的に「こういう音がほしい」とイメージしてから音・声を表現する活動につながる．また，生徒同士で，他者がどんな音を出しているんだろうか，私はこんな音で応えよう，という音楽的なコミュニケーション（コミュニケーション能力）の発達にもつながる．

このような実践の積み重ねによって，受動的なものではなく，自らが自分の出したい音で，他の演奏者とコミュニケーションを図りながら，聴き手に訴えかけることのできる生きた音楽をつくりだすことができると考える．

３）卒業後の充実した豊かな生活を送るために

ピアノの演奏会等で卒業生と会うことがある．今も生活の中に音楽が存在していることを知り，とてもうれしく思う．

また，演奏する側で活躍し続けている卒業生もいる．彼らの演奏を聴くと，音楽を心から楽しんで奏でていることが，その一音一音から感じられ，聴いているこちら側も幸せな気持ちになる．

先日，卒業生とカラオケに行く機会があった．歌っていたのは懐かしいことに学校でみんなで歌った曲の数々だった．

卒業後も豊かに音楽と関わっている姿を見ていると，音楽を学ぶ意義や必要性を思う．生徒が生涯にわたって楽しく音楽と関わっていくことのできる方法を身に付け，豊かな社会生活を送るためにも，より深まった音楽活動の楽しさを体験できるように授業づくりをしていかなければならない．そのためにも，生徒が音楽表現に対する思いや意図をもって音楽を表現すること，すなわち「音楽する」ということを大切にしたい．

参考文献

○：大友良英（2014）『学校で教えてくれない音楽』．岩波新書．

○：小原光一ほか13名（2017）『小学生の音楽３』．教育芸術社．

○：小原光一ほか14名（2017）『中学生の音楽１』．教育芸術社．

○：文部科学省（2017）『特別支援学校学習指導要領解説　各教科等編（小学部・中学部）』．開隆堂

○：文部科学省　国立教育政策研究所　教育課程研究センター（2014）『小学校音楽映像指導資料　楽しく実践できる音楽づくり授業ガイド』．学事出版

○：文部科学省（2017）『次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）』
www.mext.go.jp/component/b_menu/shigi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/09/09/1377021_1_4.pdf